

## 展示品一覧

### ○ 大図（秋田県秋田市～由利本荘市）

#### 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第二十三〈自本荘／至土崎湊／又出羽街道／至堺〉」

国宝：地図・絵図類 番号 39、縮尺 36,000 分の 1

この大図は第三次測量往路の内陸の測線と復路の海岸線の沿いの測線からなっている。第三次測量の往路では、白河、会津若松、山形をへて、享和2年7月19日にこの大図の東端に位置する堺村に到着した。堺村は仙北郡と河部郡の郡界近くであるが、この大図は「河内郡」と記し、「内」を「部」に朱書きで訂正している。測量隊は7月20日に久保田城下（秋田市）馬喰町の善右衛門に一泊し、翌21日に土崎湊の加賀屋忠兵衛で休憩した。この大図の往路の測線はこのあたりまでである。『測量日記』には、この城下の止宿宜しからず、測量差し支えと記されている。名主を呼び測量差し支えの筋を談じ、漸々家内へ手入れいたし測量すということになった。『北極高度測量記』によると、この夜は十個の星の高度を観測した結果として「**図 三九度四二分二〇**

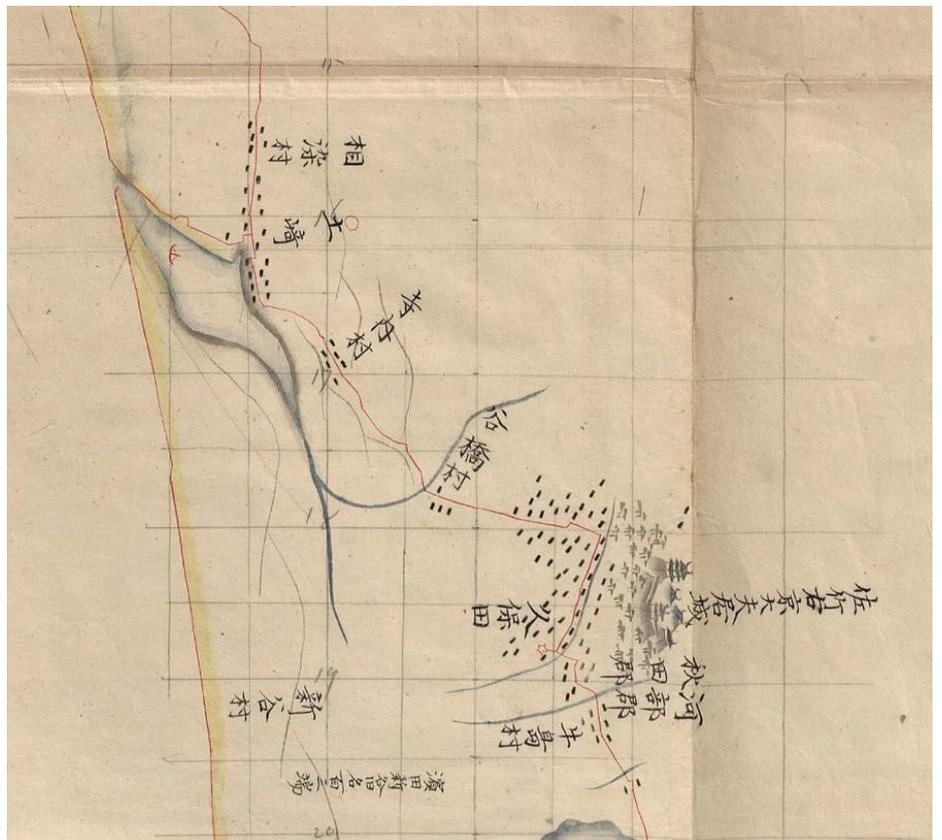
**三〇トス**」と朱書している。

復路の測線は、三厩から日本海岸を南下して同年9月5日に土崎湊の加賀屋忠兵衛に泊まった。土崎湊は、久保田城下の外港であり、雄物川の水運により内陸の穀倉地帯と結ばれ、さらには北前船の寄港地として大坂や蝦夷地と繋がって栄えた。『測量日記』にも「土崎湊町数十町、家千二百五十軒余、寺院十五ヶ寺、諸国入舟おほし」と記されている。

日本海側の測線の南端は9月8日に到着した本庄城下である。測量日記や伊能図では本荘を本庄と記す場合が多い。城下の中町の止宿については『測量日記』には「名主細屋弥治右衛門、新宅素建なり。然共諸事丁寧なり」と記している。またこの日は「終日終夜曇る、不測量」と記しているが、『北極高度測量記』によると天体観測をしなかった訳ではなく「敗瓜一」（いるか座 $\epsilon$ ）の観測結果だけが記録されている。1星だけの観測にとどまったために、「図除」と朱書きし作図に使用しないとした。

大図の欄外に「自本庄 北三尺六寸三分 至土崎 東二寸一分」

「自土崎 南一尺三寸八分 至境 東一尺九寸八分六厘」と測線の末端同士の大図上の位置と寸法が墨書されている。



アメリカ大図第62号

## ○ 大図（山形県酒田市～秋田県由利本荘市）

### 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第二十二〈自酒田／至本荘〉」

国宝：地図・絵図類 番号 38、縮尺 36,000 分の 1

大図は享和2年9月9日に本庄城下を出立し13日に酒田に着くまでの範囲である。10日は『測量日記』に「船に乗、象潟諸島を測る」とあるように水中引縄測量を行った。この時の象潟の内側の測線だけを縮尺3,600分の1という特殊な縮尺で描いた下図が地図・絵図類番号153「出羽国由利郡象潟下図」である。第108回収蔵品展のレポートで紹介した。同じく鳥海山と象潟については『会報』95号で紹介したのでここでは触れない。

図1を拡大してみると吹浦村を境として景観が一変する。断崖絶壁の続く海岸と、古川古松軒が『東遊雑記』で「すべてこの海浜はひょうびょうとせし砂原にして、草木さらになし」と記した庄内砂丘とを見事に描き分けている。大図の欄外には

「自 酒田 北四尺九寸一分四厘

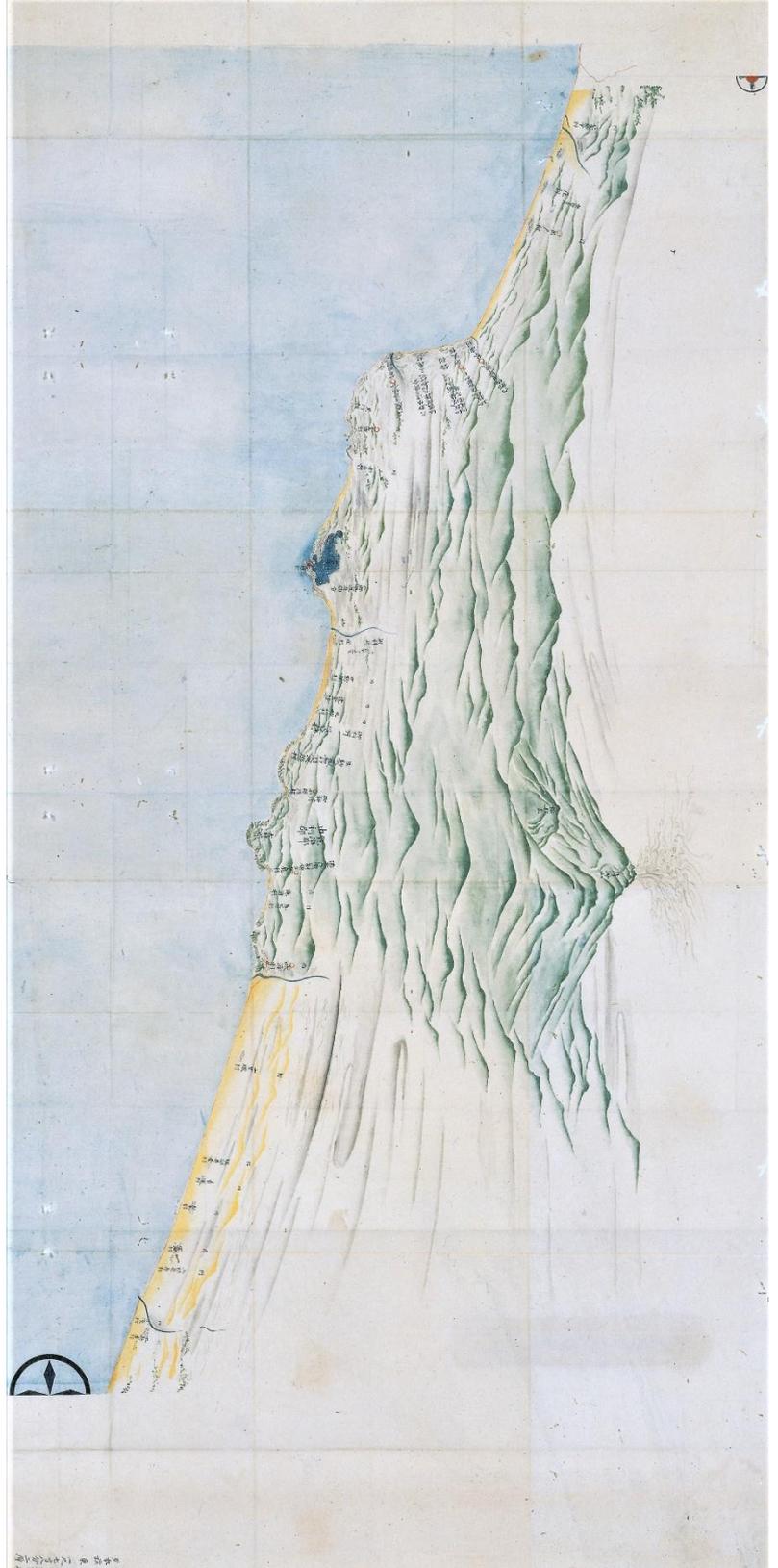
至 本荘 東一尺七寸八分二厘」

と測線の末端同士の大図上の位置と寸法が墨書されている。



右図を拡大

香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 大図（山形県酒田市～新潟県村上市）

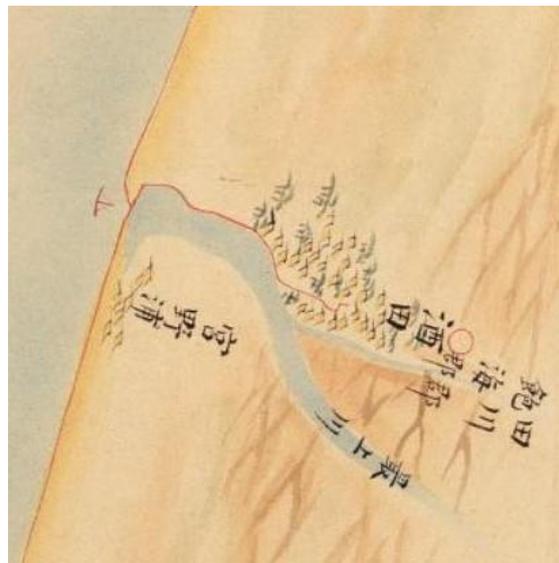
### 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第二十一〈自大川／至酒田〉」

国宝：地図・絵図類 番号 37、縮尺 36,000 分の 1

大図の範囲は享和 2 年 9 月 14 日に酒田を出立し 16 日に大川村に止宿するまでである。酒田について古川古松軒が『東遊雑記』に「この所、羽州第一の津湊、市中三千余軒、大方商家にて…九州・中国及び大坂より廻船交易のために往来して、この津に泊して国中の産物をつむことなり」と記すように、河村瑞賢が開いた西廻り航路の起点として栄えた。

湯浜村を過ぎると「右は海際、左長砂原」という庄内砂丘は終わり、代わって『測量日記』には「大難所」「海際山々悉岩石」「海辺奇岩おほし」といった記事が目立つ。

大図の欄外に「自大川 北四尺〇三分二厘 至酒田 東二尺三寸四分六厘」と測線の末端同士の大図上の位置と寸法が記されている。



国会大図 70 国会図書館デジタルコレクション

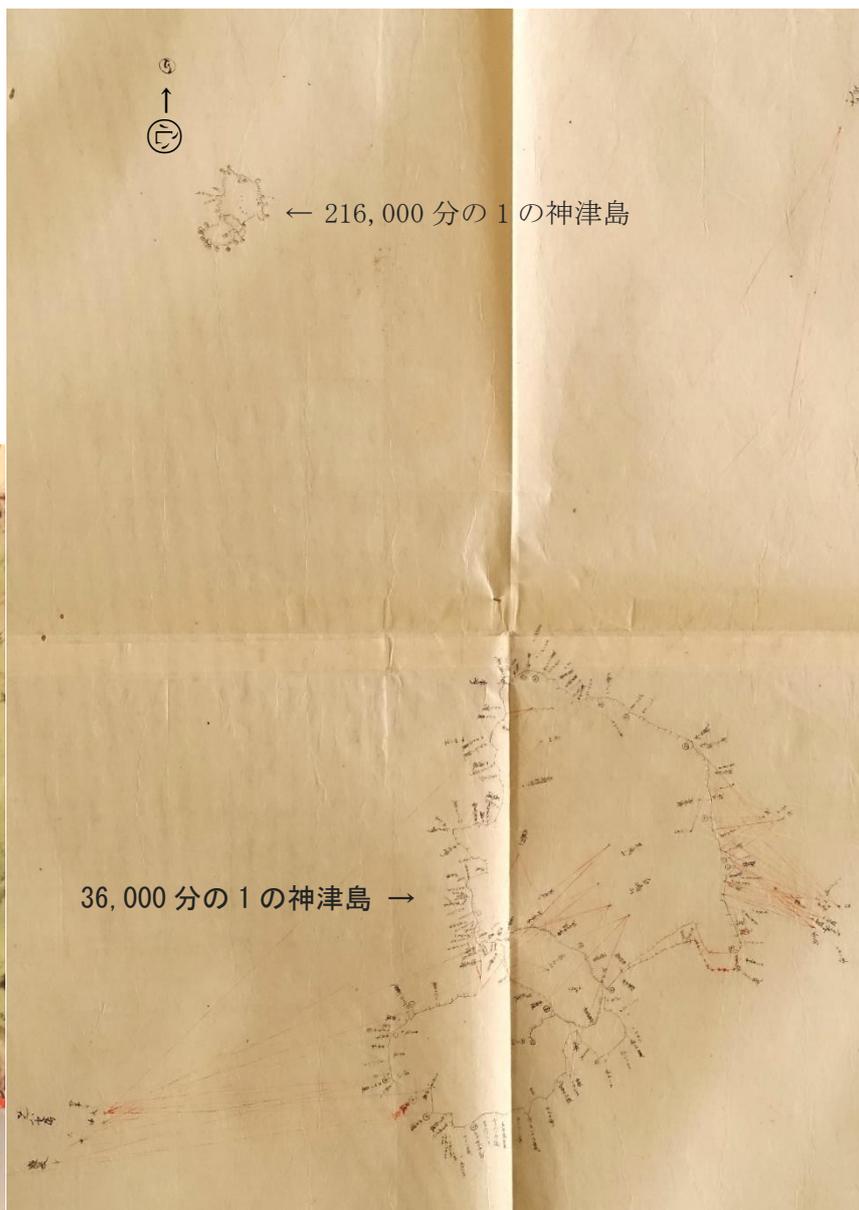
## ○ 下図（伊豆七島の神津島）

### 「伊豆七島神津島下図」

国宝：地図・絵図類 番号 178 縮尺 36,000 分の 1、216,000 分の 1、法量:64.4×47.6cm

文化 12 年 8 月 12 日～9 月 10 日の第九次測量の神津島測量の成果である。縮尺 36,000 分の 1 の神津島の北側に、216,000 分の 1 という異なる縮尺の神津島が記載されている。基準点(心)の針穴と縮尺 36,000 分の 1 の原図の屈曲点の針穴を結ぶ線の(心)側 1/6 の場所に針穴をあけていくと 216,000 分の 1 の縮尺の縮図が完成する。

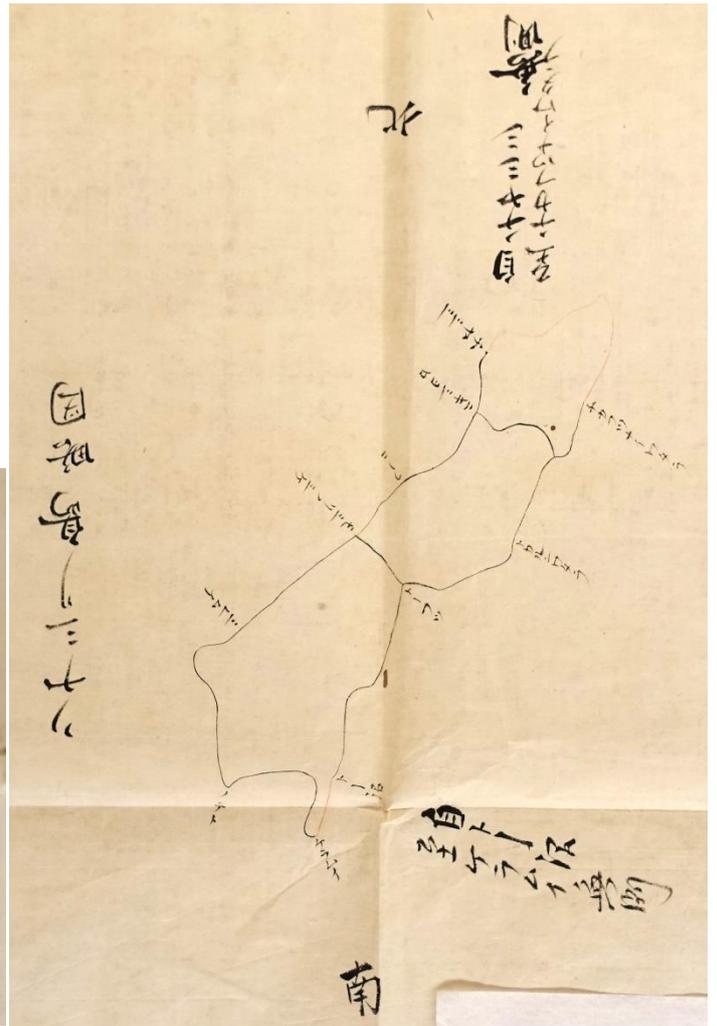
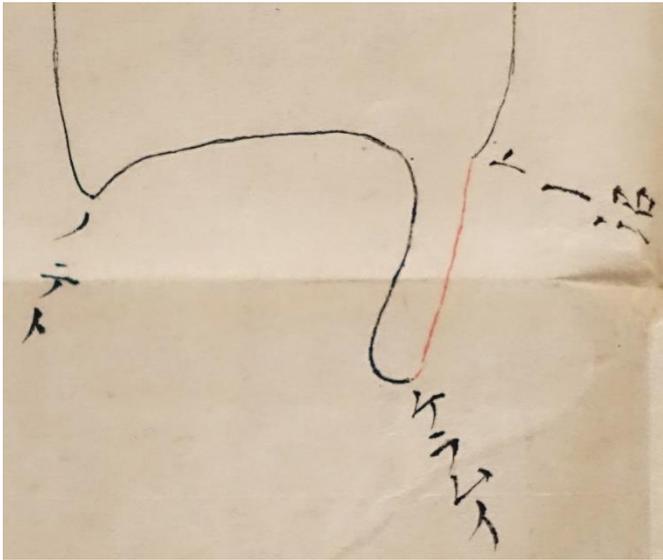
右側の下図ではわからないが、同時に展示されている左側の『伊豆国附神津島沿海地図』のレプリカを見ると、『測量日記』の「大尖岩絶壁難処」なので舟測したということがわかる。8 月 17 日の舟測中には、竿取の多田要吉が「引浪に取れ海中落入、暫時水を呑み流」という事故も起こった。



## ○ クナシリ島南部の略図

「クナシリ島下図」 国宝：地図・絵図類 番号 228、縮尺：約 260,000 分の 1、法量：48.3×39.4cm

文化庁は国宝指定にあたり資料名を「クナシリ島下図」としたが、測量データを図化した他の下図とは著しく異なる。地名を記入した箇所針穴があるかも知れないが、測点の位置（針穴）を示すケバのような短線は見あたらない。測点の間を直線的に結んで測線を描画するのではなく、曲線そのものの測線である。測量していない区間は朱線で示し、「自ト一沼 至ケラムイ 無測」などと注記している。図中に記載されているように、資料名としては「クナシリ島略図」がふさわしいと思う。誰が、何のために作成したのか興味深いものがある。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

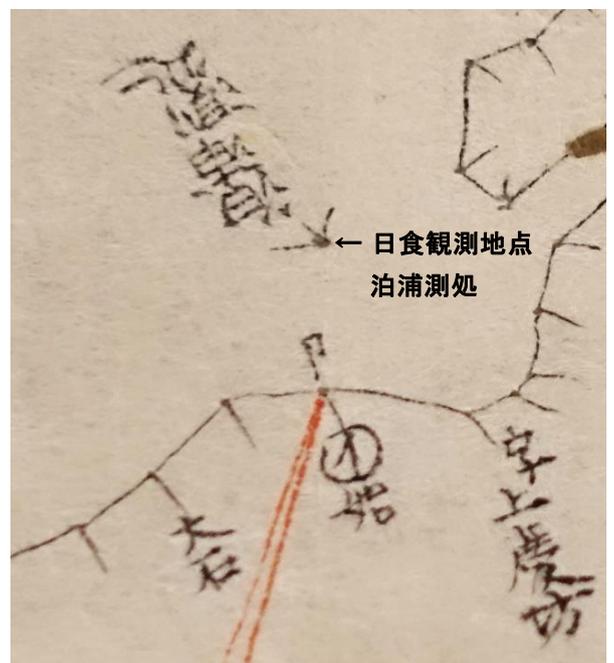
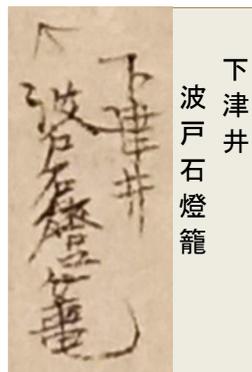
## ○ 塩飽諸島の下図の断簡（香川県丸亀市）

「塩飽本島付近下図」 国宝：地図・絵図類 番号 386、法量：42.7×33.3cm

第六次測量の文化5年9月22日に忠敬一行は金毘羅参詣を済ませ、23日に丸亀城下を出立して塩飽本島の泊浦に上陸し塩飽諸島の測量を始め、10月2日に測量を終えた。この下図は断簡であり、24日に測量した西隣の塩飽広島の東端で地名が途切れている。塩飽本島の泊浦からは朱色の方位線が2本引かれており、四国と塩飽本島の位置関係を確定している。

塩飽諸島での重要な任務は文化5年10月1日の日食観測であった。観測の場所は塩飽本島の「泊浦測処」である。下図のケバ状の3本の短線の頂点に針穴があり、観測地点である。下図では、ケバ状の3本の短線は針穴の位置を示す目印で、測線上ではない山頂や小島などの目標物に使われる

10月1日は朝から晴天で日食観測に成功した。測器の担当は、大遠鏡は坂部、小遠鏡は秀蔵、垂揺球儀は柴山と青木、象限儀は下河辺であった。7日に地図や書状とともに日食測稿を高松城下より暦局に送ることが出来た。但し、大谷亮吉によると、江戸の暦局は雨で経度算出には役に立たなかったという。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 二神島付近の下図（長崎県平戸市）

「二神島・小二神島下図」 国宝：地図・絵図類 番号 403 法量:31.8×47.4cm

第八次測量中の測量隊は、平戸藩の生月島から壱岐に渡海する途中で、壱岐水道の離島の二神島に立ち寄って測量した。文化13年3月13日のことである。坂部隊と永井隊に手分けして「二神島一周十八町六間一尺」の測量を終えた。直ちに帰港し、その日のうちに壱岐に着くことが出来た。

『山島方位記』で確認すると、壱岐水道の九州側の各地から「二神島 右」「二神島 左」「小二神島」の方位を測定して、位置を確定していることがわかる。

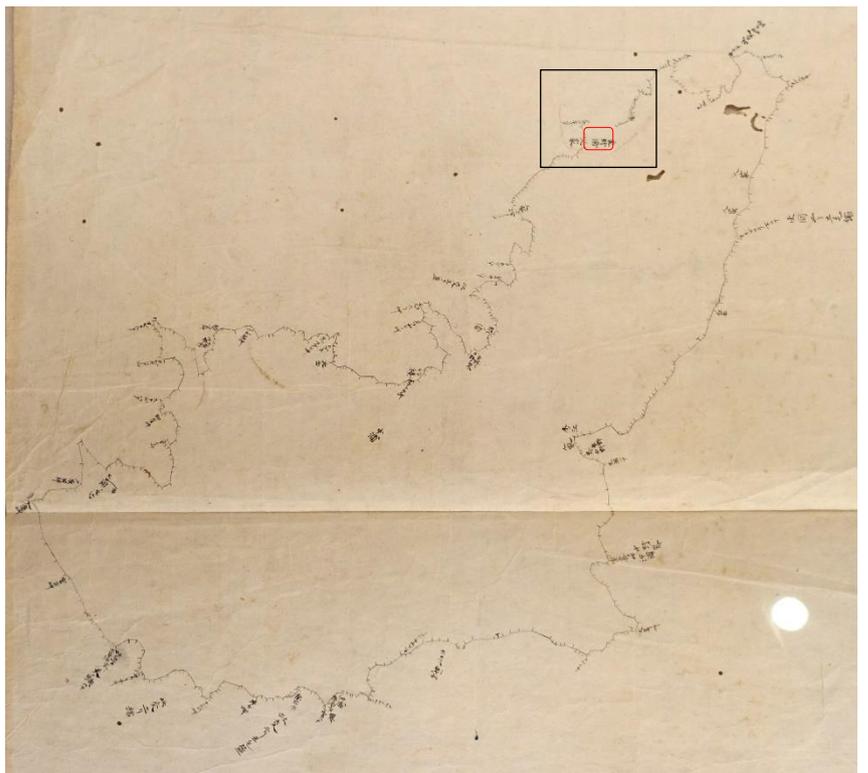
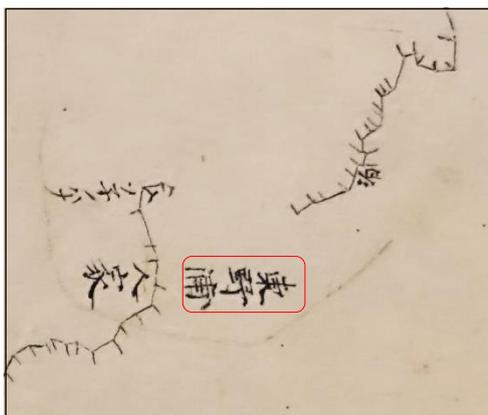


香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 大崎上島下図（広島県大崎上島町）

「大崎上島下図」 国宝：地図・絵図類 番号 405

第五次測量中の測量風景を描いた『御手洗測量之図』で知られている大崎下島での測量が終わり、測量隊は大崎上島の測量に取り掛かった。文化3年3月3日～4日の二日間で宿泊先は島の北部の東野浦である。下図の東野浦付近を拡大してみると、東野浦の北側で測線が繋がっていない。『測量日記』で確認すると、4日に東野浦止宿下で一番忠敬隊は北東側から二番坂部隊は南西側から「合測」と記されており、「不測量」の区間ではなく、下図作成上の不具合である。導線法で地図作り体験学習を行うとよくあることである。下図には5箇所「此交三リ盈」「此交四リ縮」などと記載している。測線を繋げるための修正指示であろうか。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 葛城修験の最初の行場 友島の下図の断簡（和歌山市）

### 「沖ノ島・友島・神シマ下図」

国宝：地図・絵図類 番号 408 法量：46.8×16.4cm

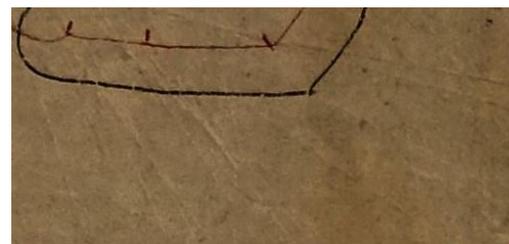
第五次測量の紀州測量の最後が文化2年8月12日である。『測量日記』によると、この日は加太浦から船出し沖ノ島と地ノ島の2島を測量して加太浦に戻った。右端に地ノ島の一部があるので断簡である。神シマは拡大すると針穴2箇所を朱線の楕円で囲んだもので測線ではない。アメリカ大図でも測線は描かれていない。観念窟があるところが虎島で、地ノ島、沖ノ島と附属する小島の神島、虎島を合わせて友島と総称する。『測量日記』やアメリカ大図においても友島は総称として用いられ、単独の島の名前ではない。その意味で、下図上に記載された島名を羅列した国宝の資料名「沖ノ島・友島・神シマ下図」は不適切である。

下側の図は白徑を明瞭にするために画像を加工したものである。白徑はヘラなどを押し当てて引かれた細い溝のことで、この下図では方位線として多用されている。但し方位線による沖ノ島の位置の確定にミスが生じて、修正したようである。

この下図に記載されている観念窟、序品窟、閼伽井、深蛇池、神島、剣池は葛城修験道の祖である役行者が開いたとされる行場であり、現在は日本遺産「葛城修験」の構成文化財に指定されている。



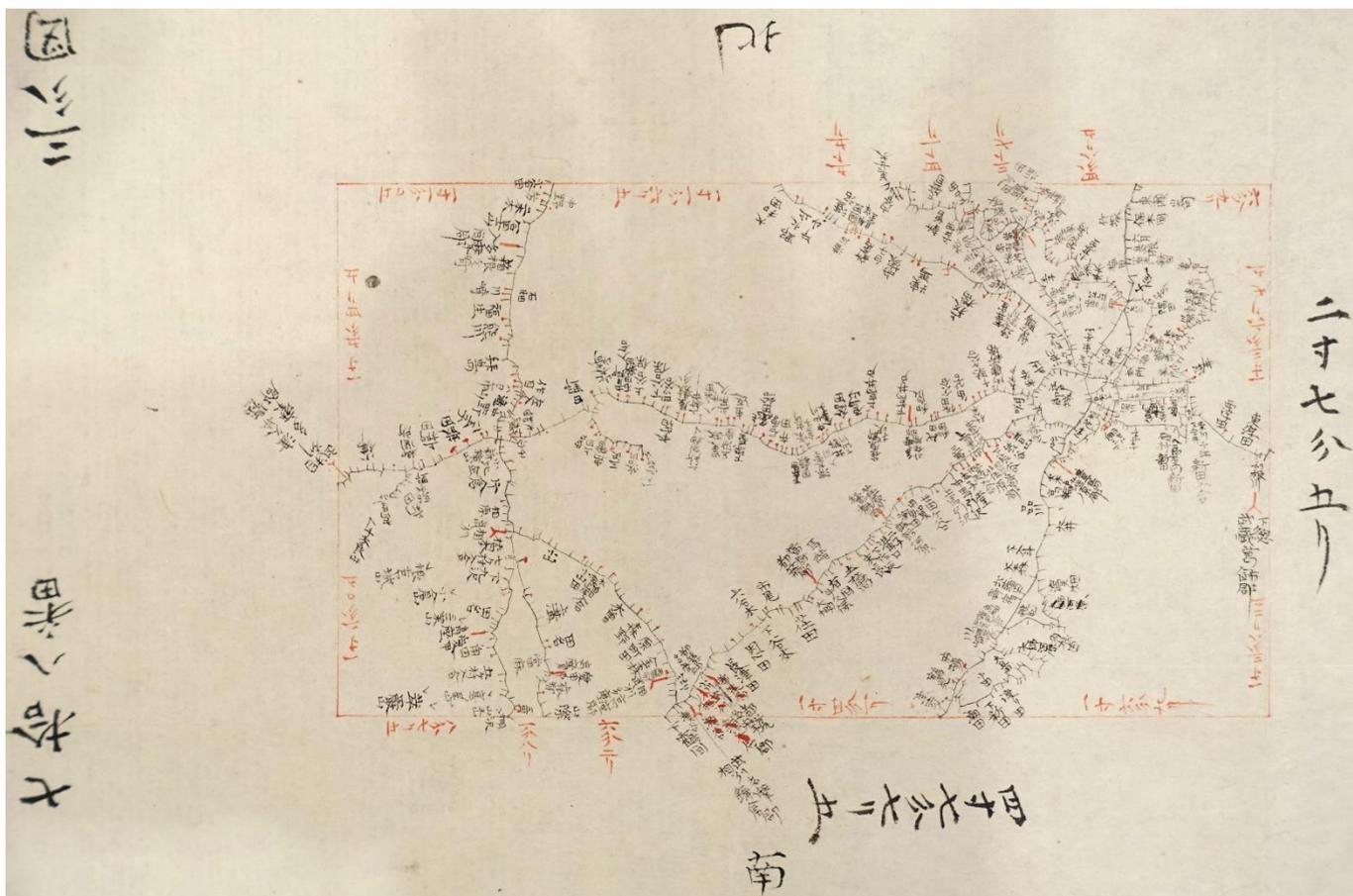
香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止



最終上呈版大図（214枚）を小図縮尺に縮図した下図群があり、現時点で東大総合図書館 56枚、三康図書館 24枚、伊能忠敬記念館 13枚、神戸市立博物館 1枚の合計 94枚の存在が確認されている。今回の展示では東京、横浜・横須賀、京都の3点が展示されている。

## ○ 小図縮尺の下図（東京） 「七拾八番（武蔵国各街道下図）」及川家文書9 縮尺432,000分の1

この下図は最終上呈版大図第90号（東京）を小図縮尺に縮図したもので、表面に「七拾八番」「三分図（一里を三分とする小図縮尺）」と大書している。図郭の東西方向と南北方向の寸法が墨書され、図郭は朱書、測線は墨書、郡界に朱線が引かれている。図郭と測線の端末間、測線の端末間の図上の寸法が朱書されている。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

○ 小図縮尺の下図（横浜・横須賀）

「七十九番（自武蔵国橋樹郡生麦村至相模国大住郡須賀村下図）」

及川家文書 10 縮尺 432,000 分の 1

この下図は最終上呈版大図第 93 号（横浜・横須賀）を小図縮尺に縮図したもの。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵  
流用禁止

○ 小図縮尺の下図（京都）

「第五十四番（自近江国蒲生郡西横関村至摂津国河辺郡西多田村下図）」

及川家文書 4 縮尺 432,000 分の 1

最終上呈版大図第 133 号（京都）を小図縮尺に縮図したもの。裏面に「第五十四番」と墨書がある。表面には「十二月朔日始めメ 同口日済」と作業期間が記されている。□には「七」と「八」が重ねて書かれている

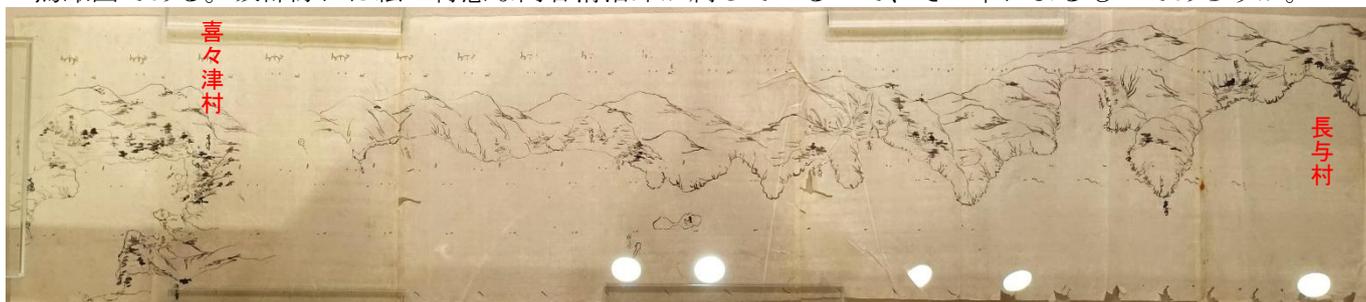


香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 長崎県諫早市付近の麓絵図

「自肥前国彼杵郡長与村至肥前国彼杵郡喜々津村麓絵図」 国宝：地図・絵図類 番号 408

第八次測量中の文化9年11月24日から大村城下～佐世保までの大手分けが始まり、忠敬本隊は大村湾東岸を、坂部支隊は大村湾西岸を北上した。この麓絵図に描かれているのは、坂部支隊による11月24日に測量した喜々津村枝化屋村内大島のあたりから、28日の長与村字一本松のあたりまでの大村湾沿岸の鳥瞰図である。坂部隊には絵の得意な門谷清治郎が属しているの、その筆によるものであろうか。



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 参考絵図（岡山）

「自備前国上道郡網浜村備前国岡山城下参考絵図」

国宝：地図・絵図類 番号 660

各地の村や組合村などから忠敬のもとに提出された村絵図で測量や地図作成の参考とされた。この村絵図には凡例や作成者の名前もなく、図も途中で途切れた断簡のようである。

岡山城下を流れる旭川の東側にも武家地や町人地の小橋町が広がり、その南側に続くのが網浜村である。寺とあるのは位置的に池田輝政の菩提寺である国清寺であろうか。



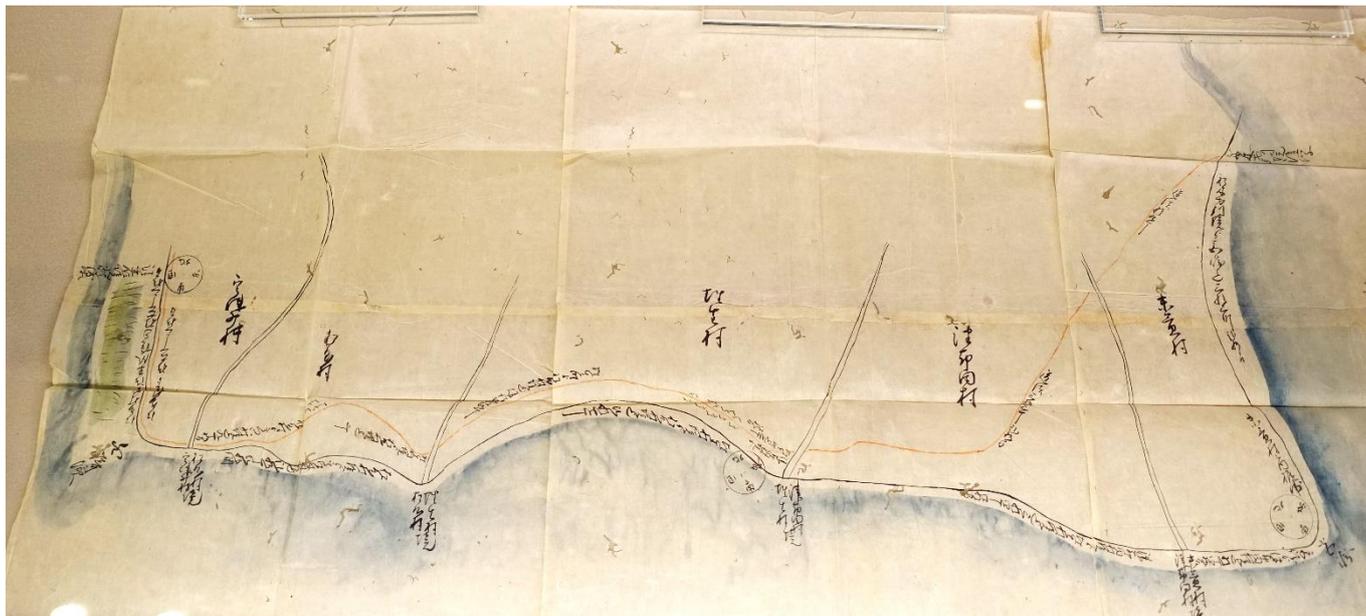
香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

## ○ 参考絵図（山口県山陽小野田市付近）

「自長門国厚狭郡末益村至長門国厚狭郡宇津井村参考絵図」 国宝：地図・絵図類 番号 681



香取市 伊能忠敬記念館所蔵 流用禁止

長州藩領の吉田宰判（代官所）管内の瀬戸内海沿いの村々が文化3年に第五次測量隊に提出した参考絵図である。東側から末益村、津布田村、壺生村、松屋村、宇津井村の五ヶ村とその境界が描かれ、各村境から村境までの距離などが記載されている。田畑、海川、砂浜などの色分けもなければ凡例もなく、一般的な村絵図から見ても極めてラフなものである。実は、この参考絵図と全く同一の範囲を丁寧に典型的な村絵図的に描いた参考絵図が存在する。地図絵図類 668 番の「自長門国厚狭郡梶浦至長門国厚狭郡宇津井村参考絵図」がそれである。伊能忠敬記念館が忠敬没後 200 年を記念して刊行した『国宝伊能忠敬関係資料』の 60 ページに図版が掲載されているので比較されたい。両者の資料名で異なるのは 681 番「末益村」と 668 番「梶浦」の部分であるが、681 番には「末益村之内梶浦」、山口県文書館毛利文庫の伊能大図『御両国測量絵図 二番』には「末益村梶浦」とあり、内容的には同じ事である。

著しく精粗の異なる絵図が二つ作られ、両方とも測量隊が収受したのはなぜなのだろうか。忠敬の村絵図に対する要求水準が高くなり、岩城島文書に絵図面は至って難しい様子と記されるようになったことの影響があるのだろうか。浜田藩士土井格助が絵図作成で右往左往させられたように、忠敬が瘧疾で倒れたことで測量隊の指示に混乱が生じたことの影響であろうか。5 月 5 日に絵図中の壺生村に発症直後の忠敬が宿泊し、医師が駆けつけている。